



いねむり

朝日新聞WEBがニューヨークタイムズの記事を紹介している。なかなか面白い。

＊

ほとんどの国では、工作中に眠るなんてとんでもないことだ。クビになるかもしれない。

ところが日本では、オフィスでちょっと眠るのは珍しくないし、文化的にも許容されている。実際、オフィスで寝込んでしまうことはしばしば勤勉さの証しとみられる。それほど仕事に打ち込み、疲れ切ってしまったからである。

それは日本で「INEMURI（居眠り）」と呼ばれている。英語だと一般に「sleeping on duty（任務中に眠ること）」と訳される。しかし、ケンブリッジ大学ダウニング・カレッジの日本学講師で、この問題に関する著書もあるブリジット・ステージャー博士は「sleeping while present（居ながらにして眠ること）」と訳した方がより適切だと言っている。

彼女によると、それは日本人の時間の使い方に関係があり、日本人はたとえ集中力が落ちようと、一度にいくつかのことをこなせると思っている。だから、退屈な定例の販売会議に出席し、（その間、居眠りをして）海辺で過ごしている夢を見ようと、それはそれで評価されると言うのだ。

居眠りはとくに、ホワイトカラーの年配従業員の間でよくみられる、とステージャー博士は言う。一方、若い従業員たちは工作中だと終日、目を覚ましていて、活力旺盛とみられたいと思う傾向がある。それに、部品の組み立てラインで働くような職場だと、コックリなどできようがない。

男女とも居眠りはするが、女性の場合は居眠りを非難されがちである。とりわけ、その姿が不作法に見えるときはそうと博士はみている。

日本では、居眠りは少なくとも1千年以上の伝統があり、それは仕事の場に限ったことではない。デパートでも、カフェやレストランでも、あるいはにぎやかな都会の道端ですら心地良さそうなちょっとした場所を見つけて居眠りをする。

とくによく見かけるのが通勤通学電車の中での居眠りだ。電車内がどれだけ混んでいても、そこは彼らにとっての事実上のベッドルームになる。日本の犯罪発生率がきわめて低いからこそ、そうできるとも言える。

「電車の中で寝込んでいたとしても、誰かにモノを盗まれるような心配はまずない」。米ハーバード大学のセオドア・C・ベスター教授（社会人類学）は言う。

社交の場での居眠りは、時にその人の名声を高めさえするのだ。ステージャー博士は、（日本の）レストランでの食事会で、女性グループに一人だけ交じった男性ゲストがテーブルについたまま居眠りをしてしまった時のことを、こう振り返っている。女性たちは「（その男性の居眠りを）紳士的な振る舞い」とほめたたえた。彼は一人で先に帰ることもできたはずなのに、あえてその場に居残って眠ること（つまり居眠り）を選んだのだから、と。

日本人の公の場での居眠りがそう珍しくない理由の一つに、自宅での睡眠時間の短さがある。政府の2015年調査によると、日本人の成人の39.5%は睡眠時間が6時間以下だった。

「その場の規範（spatial norms）」をおかすことなくちょっと眠ること。ベスター教授は、それが居眠りの不文律だと言う。「オフィスの会議室で、テーブル下の床に手足を伸ばして寝入るとか、電車内の腰掛けを数人分占領して眠ってしまうとか、あるいは公園のベンチで横になるとか……。そうしたことをすれば、社会的な叱責（しっせき）を受ける」と教授。

ステージャー博士は、目をつむることと睡眠は必ずしも同じではないと指摘する。ヒトは目をつむることで、社会的な空間にある種のささやかな私的領域をつくりだすのだ。

この視点から、ステージャー博士は、最近（日本人の）居眠りの慣習にかげりが見えだしている理由を説明できそうだとする。スマートフォンが人びとを私的領域に引きずり込み、目を大きく見開かせているからではないか、と。